

ラレタクナイの意味と用法に関する考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊井, 浩子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009633

ラレタクナイの意味と用法に関する考察

熊 井 浩 子

【要 旨】

本稿では受身プラス否定の願望の表現であるラレタクナイを、動作主の有無やその性質、用いられる動詞や受身のサブタイプ、機能などの観点から、ラレタイとの比較を交えて考察した。その結果、ラレタクナイは受身全体やラレタイに比べてAgentive Passiveの率が高いこと、知ル・見ル・言ウ・思ウなどの動詞が多く用いられ、「知覚」や「認識」、「相手との発話」や「評価」、「態度」を表すタイプの受身が多いことなどがわかった。このうち、「評価」や「態度」は上位の相手から強い力を行使されることを望むラレタイとは逆に、自己の領域や情報を保持したいという願望を表し、この部分ではラレタイと表裏の、対になった用法であると言えるが、身体的接触や好意を表すタイプはラレタイに特有であり、逆に言ワレタクナイのように、二人称動作主を伴って聞き手への行為抑制の機能を表す用法など、ラレタクナイにのみ見られる用法もあって、ラレタイ・ラレタクナイそれぞれが独特の意味・機能を担って使われている部分もあることが明らかになった。ただし、それぞれに独自の用法も、突き詰めれば、ラレタイ・ラレタクナイ各々の性質が典型的に現れている部分であると言えるが、ラレタイが自己の私的領域への侵入の受容を表すことから、時として独特のニュアンスを感じさせるのに対し、ラレタクナイはそれを望まないという人間としてごく自然な願望を表すため、ラレタイの否定形として以上の特別な構文的意味が現れにくいという違いがあることもわかった。

【キーワード】 受身 ラレタクナイ 言ワレタクナイ 行為抑制 私的領域

1. はじめに

筆者は熊井（2006）において、小説やインターネットなどの用例をもとにXがY二etc. Vラレタイで表される受身プラス希望・願望の表現、ラレタイについて、共起する動詞や用法を分析し、YがXの意図とは無関係に行う行為を表す動詞、即ち～ト見ル・認メルのような評価的行為や愛スル・嫌ウのような感情の働きを表す動詞、あるいは（1）のように、XY間にある種の力関係が想定され、YがXに強い影響を与えることを表すイジメル・振り回スのような動詞を用いて、自分に対して一方的にある行為をしてほしい、あるいは相手にコントロールしてほしいということを表す状況で多く使われていることを明らかにした。

この力関係の想定される動詞の場合には、自己制御性と他動性の高い動詞が多く、Yが意図的・一方的にXに影響を与えることを表すことから、場合によっては（2）のように暴力的・性的なニュアンスを帯びることにもなる。このような特徴から、タイは、Xが直接動作を受けないいわゆる迷惑の受身とは共起しにくいことも明らかになった。

(1) ××なら振り回されたいもんですなあ。(熊井2006より再掲)

(2) 彼女のハイヒールで踏まれたい。(同上)

このように、ラレタイは、用いられる動詞に大きな特徴があり、XがVで表される行為を直接受ける場合に多く用いられることを考察したが、本稿は、このような制約がラレタイの否定形であるラレタクナイに当てはまるのかどうかを検討することにより、さらにラレタイについての考察を深めることを目的とする。

なお、本稿では、ラレタクナイを用いた文をXがYニetc. (Zヲ) Vラレタクナイの形で表し、Xは主体、Yを動作主と呼ぶことにする。

コーパス「KOTONOHASHI少納言」および、国立国語研究所の「日本語話し言葉コーパス」の用例を用いてラレタクナイ及びそのバリエーション（以下、ラレタクナイ類）を検索したところ、「少納言」では343例、「日本語話し言葉コーパス」では18例、計361例のラレタクナイ類が検出された。なお、「言う」「云う」「いう」のような表記の揺れや「束縛する」「束縛を課す」のようなバリエーションはまとめるとともに、一つの文に複数回ラレタクナイが出てくる場合は、別の例として扱った。

また、受身のような表現は書き言葉・話し言葉とで用いられるタイプに違いがあることが許（2004）などで指摘されている。そこで、本稿では、用例全体をまとめるとともに、適宜「少納言」の小説の会話部分である「会話」、小説の地の部分「地」、ブログ・ネット相談の「相談他」、評論・エッセー・新聞記事などの「評論他」及び「日本語話し言葉コーパス」の「話し言葉」、の5つに分け、主体や動作主、用いられる動詞や頻度、受身のタイプ及び構文等を分析するとともに、ラレタイと比較したラレタクナイの意味や機能についても考察する。

2. 主体と動作主

本稿で扱うラレタクナイは受身形ラレルに希望・願望を表す助動詞タイの否定形が後接した形であり、言い切りの形では通常話し手が主体Xとなる。ただし、小説の地の文のように、登場人物の心情を作者が語る場合には（3）のように、第三者が主体になる場合もある。ノダ文や連体修飾等の場合には人称の制約はない。ただし、いずれの場合でも、希望・願望を持つ主体が受身部分の主体と一致することから、受身の主体は自ずと希望や願望を持つことのできる有情物に限られる。これはVラレタイの場合も同様である。

(3) 土蔵のある裏庭のあたりを、だれにもうろつかれたくない。留衣は庭に滑り出た。^{注1}

次に動作主については、動作主が表示された受身はAgentive Passive、そうでないものはAgentless Passiveと呼ばれているが、許（2004）の話し言葉と書き言葉における受身の調査では、Agentive Passiveは話し言葉において受身全758例中、180例、26.4%、書き言葉においては受身全279例中、45例、16%と、話し言葉のほうがその比率が高かった。その理由について許は、書き言葉においては非情物受身文の使用率が高く、その中でも主語・

動作主ともに非情物であるタイプの受身文が多いことから、その出来事を行為者の動作によるものではなく、自発的に生じたこととして述べる文が多く、動作主に関心が低いことによると結論づけている。

また田中（2005）は、小説の会話部分と対談から採取した用例をもとに、話し言葉で用いられる受身を、動作主が明記されているかどうか、明記されている場合には、それがどのような形式で現れるかという観点から分析し、動作主が明記されている場合は言ワレルで27.3%、それ以外の伝達動詞で36.5%、その他の動詞では20.3%と、伝達に関わる動詞がやや動作主を表示しやすい傾向があるものの、表示されない場合が圧倒的に多いことを明らかにしている。

一方本稿の調査では、動作主を明示したものは、361件中175件で、48.5%と半数近くにのぼる。ラレタクナイは通常の受身に比べて動作主を表示する傾向が高いこと、即ちAgentive Passiveの割合が高いことがわかる。本稿のデータは純粹な話し言葉ばかりではないが、小説ではせりふ部分か、地の文であっても、語り手が自身または登場人物の心情をそのまま語っているような部分、あるいはブログやインターネットの相談、エッセーなど、会話的な文体のものが多かった。これはラレタクナイという心情の吐露に、堅い書き言葉よりはこのような話し言葉的な文体が好まれるためとも言えるかもしれない。

しかし、厳密に許（2004）や田中（2005）と比較するためにこれをグループごとに見てみると、「話し言葉」では18例中6件33.3%とやや低いものの、小説の会話部分である「会話」は70例中42例、60.0%と、田中の20.3%よりもはるかにAgentive Passiveの比率が高いことがわかる。ちなみに「地」では87例中37例、42.5%、「相談他」では104件中38件、36.5%、「評論他」では82件中52件、63.4%が動作主を表示していた。上述のように、ラレタクナイは、話し言葉でないテキストであっても会話的な文体で用いられる傾向が高く、今回の調査ではいわゆる話し言葉と書き言葉における違いがそれほど見られなかったこともその一因であるかもしれないが、いわゆる書き言葉が多いと思われる「評論他」を筆頭に、どの場合でもAgentive Passiveの割合が高いことがわかる。

ちなみに、今回同じように「少納言」を使ってVラレタイをについて調べたところ、180の用例があったが、動作主を表示していた例は81件で、45.0%であった。ラレタイも受身全体よりもAgentive Passiveの比率が高いが、ラレタクナイはそれよりもさらに高いことになる。

ラレタクナイについては、明示された動作主のうち、人または人に準ずるものが159件、90.9%、(4)のような非情物は16件、9.1%で、人または人に準ずるものが圧倒的に多かった。このように、ラレタクナイは動作主も有情の場合が圧倒的に多く、通常の受身に比べ、動作主に関心が高いことがAgentive Passiveの多い一因であると言える。加えて、事態の生起・継続を望む、あるいは望まない場合、その行為や状態を引き起こす相手が誰であるかが非常に大切な情報であるとともに、その動作主に対する感情や働きかけを持って使われることが多いこともその理由ではないかと思われる。

(4) 妙な揉め事に巻き込まれたくない。

また、特定の動作主の場合、その動作主のみが否定の焦点^{注2}となる場合があることも、動作主を明記する動機の一つと言えるであろう。この点については3. 3で述べる。

表示された動作主の中で、動作主が特定の人である場合と、(5)のように不特定の場合があるが、不特定のうち、「他の人」・「他人」「他」が21例、「人」が17例、計38例あり、表示された動作主全体の21.7%であった。

(5) 「人に知られたくないわ」

ちなみに、話し方コーパスでは全受身の中で、不特定の「他の人」「他人」は(6)のように3例のみ、「人」については、特定は8例、(7)のような不特定は30例であった。受身全体の使用頻度は算出していないが、2万例を上回る数であることが予想される。そのうちの30例というのは、きわめて少ないことがわかる。そのうちの「人に」の1例は(8)のように、鳥との対比で用いられている。

(6) 他の人に見られたら、恥ずかしいじゃないですか。†

(7) 人に慕われるように極端に言えば毎日のように言われて育ったんです†

(8) 鳥には拾い食いの習性があるので、そうやって自分でえさを食べるって、人に与えられなくても食べてくっていう風に憶えます。†

不特定を表す「他の人」や「人」は、このような動物等との対比以外の場合には、あっても実質的な情報を持たないにも関わらず、ラレタクナイの場合、表示された動作主の2割以上がこのような実質的意味を持たない対象であったことは注目すべきであろう。これも、ラレタクナイが通常の受身に比べ、事態や状態を引き起こす動作主の存在が話し手の感情や働きかけの向かう先として非常に重要で、話し手に強く意識されるためではないかと思われる。

さらに、動作主が「お前」・「君」・「あんた」・「あなた」とそのバリエーションや聞き手を指す表現である例が17件、全体の9.7%であったが、この17件中14件は、用いられている動詞が言うであった。また、Agentive Passiveのうち、言うは19件であったが、この動詞の使用回数が28回であることから、言うの場合、動作主を明示する割合が67.9%、また明示された動作主の73.7%は二人称ということになる。田中の調査で、言うの場合特に動作主を表示する率が高かったこと、またラレタクナイが通常の受身に比べて動作主を表示する頻度が高いことは既に述べたが、言ワレタクナイの場合、Agentive Passiveの7割以上の動作主が聞き手であることは特筆に値する。この14件うち、直接聞き手に対して発話されたものが12件、相手に向かって心の中でのつぶやきが2件となる。この点についても、3. 3で詳しく考察することにする。

Agentive Passiveのマーカーについては、先に触れた許(2004)の調査では二出現率が話し言葉では92.2%、書き言葉では73.3%、また、書き言葉ではデが22.2%とこれに次ぐが、いずれも二格が圧倒的に多かった。本調査でも表1のとおり、(9)のような二格が9割ときわめて多い。デ格は、動作の道具や手段・理由等を表すが、表2のようにデ格はすべ

て動作主が非情物の場合であった。本調査でデ格が少なかったのは、話し言葉・書き言葉という以前に、ラレタクナイでは表示されている動作主の大半が有情物であるためであると思われる。

(9) 彼を、他の女性にはとられたくない。

表1 明示された動作主のマーカ―

	に	から	で	も	は	によって	その他	計
件数	159	7	3	2	1	1	2	175
%	90.9	4.0	1.7	1.1	0.6	0.6	1.1	100

表2 明示された動作主の性質とマーカ―

有 情	特 定	に	90	51.4	98
		から	6	3.4	
		は	1	0.6	
		も	1	0.6	
	不 特 定	に	58	33.1	61
		も	1	0.6	
		から	1	0.6	
		だったら	1	0.6	
非 情		に	11	6.2	16
		で	3	1.7	
		のためには	1	0.6	
		によって	1	0.6	
計					175

また、本調査では、Agentless Passiveも含め、動作主が有情物またはそれに準ずる場合が343件、95%と圧倒的に多く、非情物は18例、5%であった。ラレタイについては180件中非情物動作主は21件、11.7%と、ラレタクナイより頻度が高いが、そのうち16件は、解放/開放スルであることから、語彙による影響が大きく、特にラレタクナイに比べラレタイの方が非情物動作主になりやすいと結論づけることはできないと思われる。

表3 受身のタイプ

受身のタイプ	ラレタクナイ		ラレタイ	
	件数	頻度 %	件数	頻度 %
＋ ＋	343	95.0	159	88.3
＋ －	18	5.0	21	11.7
－ ＋	0	0	0	0
－ －	0	0	0	0

* ＋：有情 －：非情

このように、語彙の関係で動作主が非情物となる場合もあるが、表3のように、ラレタイ・ラレタクナイはいずれも、主体・動作主ともに有情物の受身が基本であり、本来人と人との関わりの中で用いられる構文であると言えるであろう。

3. 用いられる動詞

3. 1. 動詞の頻度

表4のとおり、全361例中、知ル・見ル・言ウ・思ウなどの頻度が高い。これに悟ル・聞クを合わせると、158件となり、思考や知覚を表す動詞が多く用いられていることになる。また、動詞の異なり数は119となり、1回しか用いられていない動詞が84であることから、用いられる動詞は多様であることがわかる。

表4 用いられる動詞の頻度

動 詞	出現件数
知る	65
見る	50
言う	28
思う	20
嫌う	15
聞く	9
巻き込む	7
とる	6
奪う 悟る 壊す 触る	5 × 4
引き離す 触れる(～に1) 舐める(甘く見る3)	4 × 3
壊す 邪魔する 殺す 邪魔する 転売する・やコピー	3 × 5
抱く ごまかす 落札する 追いかける わずらわす 叱る 干渉する ほめる 占領する 変える 束縛する／課す 使う 裏切る 浮気／不倫する やる・する	2 × 15
その他	1 × 84
計119	361

前述の田中（2005）に加え、許（1998他）・庵他（2014）などでも、受身とともに用いられる動詞は言うが圧倒的に多いとされている。例えば許（1998）の調査では、言ワレルの使用率は話し言葉では全体の24.3%、書き言葉では、全体の4%で、話し言葉・書き言葉ともにトップであった。さらに、一般的に受身は話し言葉より書き言葉で使われやすいにもかかわらず、言ワレル受身文に関しては話し言葉で圧倒的に多く使われる傾向があるとされているが、その理由について許は、言ワレルが聞き手と話し手の言語活動を表すだけでなく、「文句、不満」などの意味内容が含まれることが多いため、聞クという直接的な能動表現を避け、聞き手の感情や心理的变化を間接的に表現するからであるとし、これが日本語母語話者が話し手と聞き手の両者の関係を中立に保ちながらも、聞き手中心の表現を使おうとする日本語特有の表現であると結論づけている。

また、許（2004）でも、ドラマを分析した結果、全受身758例のうち、言うが21.9%と最多であり、次に多かったのがダマス29例、3.8%、逮捕スル14例、1.8%であった。ヒロインが弁護士であることから、犯罪関連の語彙が通常の場合より多かったと推察されるが、いずれにしても、言うの他には頻度の高い動詞はなかった。書き言葉の調査でも、279例の受身のうち、言うと聞クがともに11例、3.9%と最も多かったが、話し言葉では話スなどの言語活動の意味で用いられる有情受身文が多いのに対し、書き言葉では～ト呼バレテイル、～トサレテイルという意味の非情物の受身が多いという違いが見られたという。

これに対し本稿のラレタクナイの調査では、表5のように、知ルが65件で18.0%で最も多く、次いで見ルが50件、13.9%、言うは3番目で、28件、7.8%と、頻度が高いことは間違いないが、トップではない。最も頻度の高かった知ルについては、庵（2014）でも、知ラレルは話し言葉コーパスである「名大会話コーパス」では14番目、0.76%にすぎず、書き言葉である「新書コーパス」では、上位20位の圏外となり、話し言葉・書き言葉ともに頻度は高くない。このように、受身とラレタクナイで用いられる動詞の頻度に大きな違いがあることは、単なる受身とVラレタクナイに機能・用法の違いがあることを示唆している。

表5 上位8位までのテキスト別動詞頻度

	会話 70		話し言葉 18		地 87		相談他 104		評論他 82		計 361	
知る	18	25.7	4	22.2	14	16.1	13	12.5	16	19.5	65	18
見る	2	2.9	4	22.2	19	21.8	13	12.5	12	14.6	50	13.9
言う	7	10.0	2	11.1	4	4.6	12	11.5	3	3.7	28	7.8
思う	1	1.4			5	5.7	7	6.7	7	8.5	20	5.5
嫌う	3	4.3	1	5.6	5	5.7	4	3.8	2	2.4	15	4.2
聞く	2	2.9			3	3.4	2	1.9	2	2.4	9	2.5
巻き込む	2	2.9			4	4.6			1	1.2	7	1.9
触る	2	2.9					2	1.9	1	1.2	5	1.4
悟る	1	1.4			3	3.4	1	1.0			5	1.4
奪う	1	1.4			2	2.3			2	2.4	5	1.4
壊す	1	1.4			1	1.1	3	2.9			5	1.4
その他	30	42.9	7	38.9	27	31.0	47	45.2	36	43.9	147	40.7

それぞれのテキストごとの言うの頻度を見てみると、「会話」7件、10.0%、「話し言葉」2件、11.1%と、10%を超えているのに対し、「地」は4件、4.6%、「評論他」は3件、3.7%と低いことがわかる。言ワレルは話し言葉に多く用いられ、書き言葉では少ないという許の指摘は、その点ではラレタクナイにもある程度あてはまることがわかる。一方、「相談他」が12件11.5%と、「会話」「話し言葉」よりも頻度が高かったが、「相談他」はインターネットの相談サイトやブログで、書いた物であるという意味では書き言葉ではあるが、実際は相手に直接話しかけるような文体が多く、話し言葉的な書き言葉であり、その特徴がこの数字に表れているのではないと思われる。

次いで思う20件、5.5%、嫌ウ15件、4.2%、聞ク9件、2.5%で、上位の6つの動詞で187件、51.8%と過半数を超える。全て、ごく基本的な言語行動や精神活動・感情を表す動詞である。さらに、巻き込む7件、邪魔スル3件、煩ワス・占領スル・束縛スル各2件、「束縛する」という意味の縛ル・捨テル・振り回ス・引き下ロス・拘束スル・拒否スルなどが各1件であった。これらは全て、受身が話し手のコントロールを超えて、一方的に降りかかってくる事態を表すことから、ラレタクナイは、そのような事態の生起を望まないことを表すタイプの用法が多いことがわかる。このような強い力による行為がコントロールを超えて降りかかってくるタイプの動詞という点ではラレタイと共通であるが、ラレタイクナイで用いられる動詞はそれらとどのような違いがあるのかを検討する必要がある。

表6 ラレタイに前接する動詞

動 詞	出現件数
解放／開放する	19
認める	18
言う・抱く／抱きしめる	17 × 2
愛する	16
見る	14
思う	10
好く	8
包む	7
はさむ・ほめる	6 × 2
いじる・癒やす	5 × 2
救う／救済する	4
呼ぶ・くどく・いじめる・尊敬する・殺す／ぶっ殺す	3 × 5
蹴る・招く・ふる・踏む・さらう・つぐ・しばく・誘う・ちやほやする・気に入る・受け入れる・満たす・甘える・励ます・注目する	2 × 15
その他	1 × 83
計 117	280

熊井（2006）で用いられたラレタイ100件と今回新たに「KOTONOHA少納言」で検索した180例、計280例の動詞の頻度は表6のとおりであった。解放／開放スル19件、6.8%、認メル18件、6.4%、言う・抱く／抱キシメル17件、6.1%、愛スル16件、5.7%、見ル14件、5.0%、思ウ10件、3.6%となり、ラレタクナイで上位である言う・見ル・思ウ・嫌ウはあったが、ラレタクナイで最も頻度の高かった知ルはなかった。これは、ラレタクナイがラレタイの単なる否定形ではなく、通常の受身に加え、ラレタイとも異なる機能を持って使われていることを示唆するものである。

3. 2. 受身のサブタイプ

志波（2012）は受身文を主語と動作主の有情・非情の別で4つに分類した上で、動詞の語彙的な意味と結合価をもとに細かいサブタイプに分類し、小説の会話文・小説の地の文・新聞の報道文・評論文の4種のテキストにおける受身文のタイプの分布を調べた。その結果、会話文では特に褒メル・叱ルなどの「表現的態度」、笑ウ・見放スなどの「評価動作的態度」など、なんらかの「態度」を表す受身や、渡スなどの授受を表す「所有関係変化」、ブツケル・向ケルなど、相手への動作を表す「相手への動作」、告ゲルなどの相手への発話を表す「相手への発話」などの「相手の受身」及び、位置や身体、社会的変化を表す「変化」の受身がそれぞれ2割前後であったが、その中でも、言ワレルに代表される「相手への発話」を表すタイプが最も多かった。この点は許（1998）他の論考とも一致している。さらに、地の文では、存在様態や自然現象を表すタイプが多いことと、心理状態を表す有

情主語非情行為者受身文の割合が高いこと、報道文では具体的な時と場所で行事が催行されることを表すタイプが圧倒的に多く、評論文では「AがBに見られる」という存在の確認や論理的関係を表す受身文が特徴的に現れたことなどが明らかになった。

ここで、ラレタイとラレタクナイで用いられる受身の特徴を明らかにするため、これらで用いられた動詞を、志波にしたがって再分類する。表7は志波にならって本調査の結果をまとめたものである。下位グループで見ると、ラレタクナイについては、全てのグループにおいて多かったのは知ル・悟ルなどの「知的認識」を表すタイプで、77例、21.3%にあたる。次いで見ル・目撃スルなどの「知覚」を表すタイプが40件、11.1%、舐メル・裏切ルなどの「評価動作的態度」38件、10.5%、言う・指摘スルなどの「相手への発話」が36件、10.0%、思ふ・〜ト見ルなどの「知的態度」が31件、8.6%とこれに続く。ただし、多いものでも2割か1割程度と、際だって頻度の高いものはなく、多くは1%前後で分散している。

上位の受身文タイプでは、「認識」が117件32.4%と最も多く、次いで「態度」が94件、26.0%と、自分に対する何らかの認識や態度についての受身が圧倒的に多い。次は「相手の受身」60件、16.6%であるが、その6割は言うなどの「発話の受身」であった。

ラレタイについては、下位グループでは、認メル・思ふなどの「知的態度」が18.2%と最も多く、次いで抱ク・挟ムなどの「接触」14.6%、チャホヤスル・甘ヤカスなどの「評価動作的態度」13.9%、愛スル・好クなどの「感情－評価的態度」12.5%となっており、この上位4つで6割と、ラレタクナイに比べて一部に集中しているのが特徴である。また、ラレタクナイで多かった「評価動作的態度」や「知的態度」はラレタイでも頻度が高かったが、知覚を表すタイプは2.1%と、ラレタイではごくわずかであった。上位のタイプでは、何らかの「態度」を表すものが50.0%と半数を占め、後は「接触」を含む「動作」が15.4%、「相手の受身」が12.9%となっている。

表7 受身のサブタイプ

有情主語有情行為者受身															
受身文タイプ	下位受身文タイプ	ラレタクナイ								ラレタイ					
		せりふ	話しことば	地	相談	その他	小計	計	計	小計	計				
AA 変化	AA 位置変化	1	1.4%	1	5.6%	2	2.3%			4	1.1%	6	2.1%	13	4.6%
	AA 生理的变化	2	2.9%			2	2.3%	2	1.9%	1	1.2%	7	1.9%		
	AA 社会的変化	2	2.9%	1	5.6%			2	1.9%			5	1.4%		
	AA 強制使役														
AA 動作	AA 接触	2	2.9%					5	4.8%	1	1.2%	8	2.2%	41	14.6%
	AA 催促									2	2.4%	2	0.6%	2	0.7%
AA 認識	AA 知覚	4	5.7%	2	11.1%	19	21.8%	7	6.7%	8	9.8%	40	11.1%	4	1.4%
	AA 知的認識	21	30.0%	4	22.2%	20	23.0%	15	14.4%	17	20.7%	77	21.3%	2	0.7%
AA 態度	AA 感情－評価的態度	4	5.7%	1	5.6%	5	5.7%	4	3.8%	2	2.4%	16	4.4%	35	12.5%
	AA 知的態度	1	1.4%			9	10.3%	11	10.6%	9	11.0%	30	8.3%	51	18.2%
	AA 表現的態度					2	2.3%	1	1.0%	4	4.9%	7	1.9%	12	4.3%
	AA 評価動作的態度	10	14.3%			7	8.0%	11	10.6%	6	7.3%	34	9.4%	39	13.9%
	AA 接近	2	2.9%							2	0.6%			3	1.1%
	AA 相手への動作	1	1.4%			2	2.3%	1	1.0%			4	1.1%	4	1.4%
AA 相手の受身	AA 所有関係変化			1	5.6%	4	4.6%	3	2.9%	5	6.1%	13	3.6%	5	1.8%
	AA 相手への発話	8	11.4%	3	16.7%	6	6.9%	14	13.5%	5	6.1%	36	10.0%	23	8.2%
	AA 相手への提示							1	1.0%			1	0.3%	1	0.4%
	AA 相手へ要求的態度	1	1.4%					1	1.0%			2	0.6%		
	AA 相手への態度					1	1.1%			2	2.4%	3	0.8%	3	1.1%
AA 持ち主の受身	AA 持ち主	2	2.9%	2	11.1%	2	2.3%	16	15.4%	9	11.0%	31	8.6%	3	1.1%
AA はた迷惑型	AA はた迷惑	4	5.7%	1	5.6%	1	1.1%	8	7.7%	5	6.1%	19	5.3%	1	0.4%
有情有情その他	やられる			1	5.6%			1	1.0%			2	0.6%		
	有情有情その他														
TOTAL		65	92.9%	17	94.4%	82	94.3%	103	99.0%	76	92.7%	343	95.0%	242	86.4%
有情主語非情行為者受身															
受身文タイプ		せりふ	話しことば	地	相談	その他	小計	計	計						
AI状態型		5	7.1%			6	7.3%	17	4.7%	17	4.7%	38	13.6%	38	13.6%
有情非情その他			1	5.6%			1	0.3%	1	0.3%					
TOTAL		5	7.1%	1	5.6%	6	7.3%	18	5.0%	18	5.0%	38	13.6%	38	13.6%
総合		70	100%	18	100%	87	100%	361	100%	280	100%	280	100%	280	100%

どのグループも「評価動作的態度」が多いことは共通であるが、ラレタイは何らかの意味で強い立場にあるYが弱い立場にあるXを自己の下位者として扱うタイプの頻度が高い。その中には、弄ル5、イジメル・モテアソブ・アソブ・虐ゲル・振り回ス各1のような、弄ぶタイプのものや、チャホヤスル2、猫扱イスル・「イイ子、イイ子」スル・カワイガル・甘ヤカス・手ノヒラデ転ガス各1のように、甘く取り扱うというタイプのものが多い。一方ラレタクナイは、(10)のように振り回ス・束縛スルなどの自由を奪うタイプが最も多く、次いで、仲間ハズレニスルや裏切ル・舐メルのような、仲間以外・同等以下として扱うタイプの動詞が多かった。

(10) グリフィンは今、誰にも邪魔されたくなかった。

また、ラレタクナイとラレタイに共通して多い「知的態度」については、ラレタイの「評価」では認メルが最も高かったのに対し、ラレタクナイでは認メルは1件もなく、思ウ20件、〜トetc.見ル5、評価スルなど、動詞それ自体は評価という意味では中立な動詞が多く用いられ、悪い評価を受けたくないことを表すものが多いという違いが見られた。また、ラレタクナイが知ル56、嗅ギツケル・気ヅク・見破ルなどの「知的認識」や見ル28、目撃スル・聞ク9などの知覚を表すものが多いのに対し、ラレタイは抱ク／抱キシメル16、ナデル・キススルのような好意的な接触だけでなく、挟ム6、蹴ル・踏ム・跨グ・シバク各2などの暴力的な行為を連想させるものも含む「接触」や嫌ウ・憎ムなどのマイナスの感情も少数含むが、多くは愛スル16、好ク8、尊敬スル3、気ニ入ル・受ケ入レル各2などの好意的な「感情－評価的態度」が多いことがわかる。このように、ラレタクナイは誰かに秘密や情報が露見することを恐れるものが多く、ラレタイは相手が自分に何らかの接触的行為をすることを望むものが多い。

さらに、ラレタクナイはほとんどの下位受身文タイプに分散していて、「知的認識」は21.3%と高いがそれ以外は「知覚」11.1%、「相手への発話」10.0%、「評価動作的態度」9.4%、「知的態度」8.3%と、突出したタイプがないのに対し、ラレタイは「知的態度」18.2%、「評価動作的態度」13.9%、「感情－評価的態度」12.5%と、「態度」を表す受身に集中しており、「接触」14.6%を合わせると、この4つの下位受身文で6割になるという分布の違いが見られた。

このように、ラレタクナイは、(11)のように知ルが突出して多いことから、「認識」が最も多く、次いで(12)のように思ウなどの「態度」、「相手の受身」の順だったのに対し、ラレタイは半数が「態度」、次が「認識」や「相手の受身」であるという違いがあった。即ち、ラレタイはYがある態度や評価を持つことをXが望むというタイプの受身が圧倒的に多く、次いでYがXに対してなんらかの接触的な行為をすることを望むタイプの受身が多い。また、ラレタクナイはYがXに対して何らかの表現的行為をすることを望まないというタイプが最も多く、YがXに対して何らかの態度を持つことを望まないというタイプがこれに次ぐが、それ以外のタイプも多く、ラレタイほど、典型的な用法を持たないことがわかる。

(11) 泣いてた理由なんて知られたくないわな。

(12) それに、無礼な人間だと思われたくない。

次に、志波（2012）では主体が有情、動作主が非情の有情主語非情行為者（AI）受身文では、苦シメラレル・圧倒サレル・忙殺サレルのような「心理・生理的状态動詞」及び圧迫サレル・追ワレルなどの「接触動詞」や「接近動詞」を中心とした動作動詞が用いられるとされている。志波の調査では、このような「心理・生理的状态型」の受身文が全ての受身文の中に占める率は、小説の会話文テキストで4.6%、小説地の文テキストで0.0%、報道文2.1%、評論文3.2%と、頻度は高くないが、今回のラレタクナイの調査でも頻度は低く、計18例、5.7%のみであった。動詞は巻キ込ム7、煩ワス・束縛スル／ヲ課ス・占領スル各2、邪魔スル、「束縛する」の意の縛ル・捉エル・奪ウ・起コスが各1件で、起コス以外は、全て相手の心身の自由やコントロールを奪ったり妨げたりするタイプの動詞であった。テキストのタイプ別に見ると、非情物は小説の会話部分で70件中5件、7.1%、話し方コーパスでは18件中1件、地の文では87件中5件5.7%、相談他は104件中1件1.0%、評論他は82件中6件、7.3%となっている。

「少納言」のVラレタイについては、動作主が非情物であった例は31例、開放・開放スルが19例で最も多く、癒ス5件、包ム3件、満タス2件、コノ身ヲ引キ裂ク・逃レルがそれぞれ1件ずつであった。熊井（2006）でも、非情物が動作主である例は100例中、包ム・心洗ウ・癒ス・巻ク・逃レルの5例のみであった。これらは、「心理・生理状態」型に分類されるが、用いられるのは、ラレタクナイとは反対に心身を楽し・自由にするタイプの動詞とプラスまたはマイナス意味で強い力で影響を与えるタイプの動詞であった。非情物動作主の場合には、ラレタイ・ラレタクナイともに多くが何かから自由になることを望む用法が多いことがわかる。

以上のことから、ラレタイは熊井（2006）で考察したとおり、XとYの力関係を反映し、弱い立場にある自分に力を行使してほしい、または自己にいい評価をしてほしい、あるいは接触的な行為をしてほしいというXの願望を表す用法が圧倒的に多く、それが甘えや特別な嗜好を想起させることもある。ただし、これらの特徴は、Yが有情物である場合に限られる。一方ラレタクナイは、束縛や仲間はずれ、あるいはマイナスの評価や秘密の露見を恐れる場合に多く用いられていることがわかった。それは、ラレルで悪いことが自分に降りかかってくる、タクナイでそれを望まないということを表すという意味で、ごく自然な帰結であり、ラレタクナイという構文故に特別な意味が生ずるわけではないことを表していると言えるであろう。

3. 3. ラレタクナイで頻度の高かった動詞

本節では、ラレタイ・ラレタクナイそれぞれの特徴をより明確にするため、両方で頻度の高かった見ルや言う及び、ラレタイでは1件もなく、ラレタクナイでは最も頻度の高かった知ルについて考察する。

知ラレタクナイ

(13) のように、ラレタクナイでは知ルの頻度が高いのに対し、熊井(2006)の調査では知ラレタイは1件もなく、今回改めて「少納言」で検索してみたところ、(14)が1件だけあった。一方、知ッテホシイは82件、知ッテモライタイは(15)のように72件あった。

(13) 「そうしなきゃいけないの？嘘をついたことを知られたくないんです。」

(14) その動機は、ただ「何か大きなことをして世の中に名を知られたい」だけだったという。(少納言)

(15) 「貴重な文化財を永く保存し、みんなに知ってもらいたい。」

このように知ルはラレタイの形では用いにくいことがわかる。その理由はなんであろうか。熊井(2006)で明らかになったように、ラレタイは評価的行為や感情を表す動詞またはYがXに強い影響を与えることを表す動詞を用い、自分に対し一方的にある行為をしてほしいことを表し、後者の場合には、自己制御性と他動性の高い動詞が多い。この点知ルは評価・感情の動詞ではないし、過程の自己制御性しか持たず、他動性も低い。相手が一方的に主体や主体のことを知ることを望むこと自体が矛盾でもあるし、特別な嗜好等、ラレタイを用いる必然性もない。知ラレタイが用いられにくいのはこれらの理由によると思われる。そのような場合には、相手が自分のことを知ることを望むという通常の表現である知ッテホシイや知ッテモライタイが用いられることになる。

見ラレタイと見ラレタクナイ

熊井(2010)では、インターネットで検索した見ラレタイの上位200件の用例を調べたところ、(16)のような「目で事物の存在などをとらえる」「視覚に入れる」という意味の例が63件、31.5%、残り137件、68.5%が、(17)のような「観察し、判断する」「評価する」という意味の用例であった。

(16) 旦那にもっと見られたい。(熊井2010より再掲)

(17) 10歳若く見られたい。(同上)

「視覚に入れる」という意味での見ルを主体別にまとめたのが表8である。見られたい主体(X)と見られる対象が一致している場合(A)が34件、それに準ずるものが26件、計60件となり、視覚に入れる意味の見ルを用いた見ラレタイ63件中60件、95.2%は見られたい対象が自分であった。それ以外は3件、5%のみであったが、これらも親族(B5)や持ち物(B6)に比べればXと切り離しにくく、Xそのもの、あるいはXを具現化した対象であると言える。

表8 見ラレタイ見ル対象（熊井2010より）

見　　る　　対　　象				件　数	割　合
視覚に入れる	A	X		34	54.0
	B	Xの	1. 身体・着衣	10	15.9
			2. 行為	12	19.0
			3. 作品	6	9.5
			4. 排泄物	1	1.6
			5. 親族	0	0
			6. 持ち物	0	0
	小　計			63	100

久野（1983）はinvolvementという概念を用い、受動文の主語が埋め込み文によって表される行為・心理状態にインヴォルヴしている度合いが高いほどその受身文は中立受身として解釈されやすく、その度合いが低いほど迷惑受身としての解釈が強くなるとしている。見ルは他動詞ではあるが、このinvolveされる程度が低く、通常受身文では能動文にない迷惑の意味が生じるとされる。このinvolvementはAが最も強く、B5・6が最も弱くなる。ラレタイにはB5・6のような例はなく、いわゆる第三者の受身も見られなかった。即ち、見られたい対象は自分や自分に準ずる物でなければならず、Yの見るという行為がXに直接向けられていると解釈できる場合にのみ視界に入れるという意味での見ルを用いた見ラレタイが可能になることになる。

一方見ラレタクナイについては、自分自身が3件、X自身に準ずるものでは、行為や状態が最も多く、身体や着衣がこれに次ぐ。この24件が、見る行為を直接Xが受けているとみなされるもので、53.3%となる。しかし、所有物や親族などもあり、見ラレタイとは違って、Xが直接の対象でない場合も多く用いられていることがわかる。見ラレタクナイの場合には見ラレタイに比べて、一方的に行為を受けるというニュアンスは薄れているように思われる。

表9 見ラレタクナイとX

		会話 2	話し言葉 4	地 15	相談他 13	評論他 11	計
X			1	1		1	3
Xの	1. 身体・着衣			4	1		5
	2. 行為・状態	2		7	3	4	16
	3. 写真・手紙		2				2
	4. 作品・メッセージ				2		2
	5. 所有物		1	2	2	2	7
	6. データ・情報				4	4	8
	7. 親族・恋人			1	1		2

他方、(18)のような評価を表す見ラレルは、自分でコントロールするのはむずかしい事態である。評価は通常Xの意志とは無関係に行われるYの自立的な行為であり、見ルという行為がXのコントロールの及ばないところでX自身に一方的に降りかかって来ることを表しているからである。

(18) 10歳若く見られたい。(熊井2010から再掲)

見ラレタクナイに関しては、「地」で4件、「評論等」で1件、計5件で、見ラレタイに比べて頻度かなり低かった。評価については思ウが20件で、見ラレタクナイよりも思ワレタクナイが多く用いられていることがわかる。

また、見ラレタイの場合、Agentive Passiveが視界に入れる意味の見ルは、63例中13件で、そのうち特定の人物に限定されている例は4件であった。評価の見ルは137例中、7例、そのうち6例は「誰からも」や「異性から」のような不特定の対象であった。このように、見ラレタイの場合、見ル主体が明記されていない場合が180例、9割、明記されていても不特定である場合が20件中15件であった。

一方見ラレタクナイについては、Agentive Passiveは50件中30件、そのうちの29件は「目にする」の意の見ルで、そのうちの19件は(19)のような不特定の対象であった。評価の意を表す見ルの場合の1件も人ニであった。

(19) ほかにの人に中身を見られたくない。

見ラレタイは、不特定の動作主からなんらかの評価を受けることを望むという用例が圧倒的に多く、次いで不特定の動作主から自分に視線を向けられことを話し手が望むことを表す例が多かった。これは、Xの働きかけの及ばないYの一方的な行為として成立するある事態の実現をXが望むという性質によるものである。これに対して見ラレタクナイの多くは、不特定の対象が動作主である場合が多かった点では共通であるが、話し手または話し手の所有物や親族等が不特定の対象の目に触れることを望まないという意味で用いられている場合が多かった。即ち、見ラレタクナイは、見ラレタイとは異なり、Xのコントロールを超えたYの一方的な行為がX自身に直接降りかかってくるというよりは、秘密や情報がYの目に触れるのを望まないことを表す用法が多いことがわかった。同じ見ルという動詞であってもラレタイとラレタクナイとで使い方が異なることになる。

言ワレタクナイ

言ワレルについて許(2005)は、(20)のように、発話された言語内容を第三者に伝える場合には、両者が有情物同士であっても中立的・客観的な「情報伝達」の意味が強いが、(21)(22)のように、「言われる」発話内容が直接「聞き手」に向けられる場合には、「文句・不平・不満を言われる」「発話内容によって迷惑を被る」といった内容が含まれると述べている。この場合の「聞き手」というのは、筆者が上で用いた発話全体の聞き手という意味ではなく、だれかの「言う」という発話が向けられた相手という意味であることに注

意が必要である。このような混乱を避けるため、本稿ではこのような「聞き手」を「言う」という発話の「受け手」と呼ぶことにする。

(20) のぞみ：私…いつも甘いって言われます…。

(例文・下線は許2005)

(21) 田中：俺が…ローンの算段で女房にプチプチ言われた日だった…。(同上)

(22) 薫之：でも、着た切り雀じゃあ…ご近所になんて言われるか…。(同上)

許は言ワレタクナイには言及していないが、いずれにしても、許によれば、(21)(22)のように言う発話内容が直接「受け手」に向けられる場合には、「受け手」が何らかの感情を持つようになった点で(20)とは異なった語用論的特徴を持つことになる。即ち、言うの発話内容を自分の内面や性格など、自身の持ち物の一種と捉えることから、間接受身文と類似しており、自分の内面的な部分について触れられた発話内容によって「受け手」がマイナスの心境の変化、もしくは不満や迷惑の感情を抱くようになったことを表すことになるということである。

表10 田中(2005)より

相当する伝達動詞	使用頻度	使用率(%)
伝えられる	27	19.4
命令(指図)される	20	14.4
呼ばれる	16	11.5
聞か(尋ねら)れる	15	10.8
イヤミを言われる	12	8.6
説得(忠告)される	11	7.9
非難(批判)される	9	6.5
ほめ(おだて)られる	8	5.8
けな(ばかに)される	5	3.6
説明される	5	3.6
頼まれる	3	2.2
勧められる	3	2.2
干渉される	1	0.7
注意(警告)される	1	0.7
禁止される	1	0.7
誘われる	1	0.7
断られる	1	0.7
合 計	139	100.0

前述の田中(2005)は、話し言葉で用いられる言ワレルと言ワレル以外の伝達動詞が全

体の使用例の35.1%を占め、非常に頻度が高いことを明らかにした。また、全体の23.2%と、もっとも頻度の高い言ワレルがどの種類の伝達動詞の意味で用いられているかを調べた結果、表10のように、伝エラレル・命令サレル・呼バレル・聞カレルの順であることがわかった。そして、表11のように、この言ワレルの8割が文脈から解釈される語用論的意味において、「被害」「迷惑」などマイナスの意味で用いられているとしている。

許や田中のように、言ワレルが受け手の不満や迷惑の感情を帯びるのであれば、これが事態や状態の生起を望まないことを表すタクナイと非常に相性がいいことは当然であると言えるであろう。

表11 田中（2005）より

	マイナス	プラス	中立	合計
出現数	80	17	42	139
出現率（%）	57.6	12.2	30.2	100

表12 言ワレルが相当する伝達動詞

相当する伝達動詞	使用頻度	使用率（%）
伝えられる		
命令（指図）される		
呼ばれる		
聞か（尋ねら）れる		
イヤミを言われる	1	3.6%
説得（忠告）される	1	3.6%
非難（批判）される	12	42.8%
ほめ（おだて）られる	1	3.6%
けな（ばかに）される	6	21.4%
説明される		
頼まれる		
勧められる		
干渉される	1	3.6%
注意（警告）される	2	7.1%
禁止される		
誘われる		
断られる		
励まされる＊	1	3.6%
不明＊	3	10.7%
合 計	28	100%

＊は田中にはないもの

本稿の調査で言ワレルは28件であったが、その伝達的な意味は表12の通りである。今回の用例では、(23)のような励ましの意味で用いられている言ワレルが1件と文脈からはどの意味か特定できないものが3件あった。

(23)「君は一人でも生きていける」とは言われたくない—30代独身恋愛事情
(本タイトル)

本稿で扱うラレタクナイは、事態の生起を望まないというタクナイの性質上、田中の「語用論的意味において、「被害」「迷惑」などのマイナスの意味」を表すものに限られる。それ故、非難サレル・ケナサレルなど、動詞そのものがマイナスの意味を持つ場合が最も多いが、伝エルのように、それ自体は中立な意味やホメルのように本来はプラスの意味で使われる言ワレルも使用可能である。即ち、マイナスの意味を持つ場合だけでなく、褒め言葉や心配・忠告・アドバイス等、発話者に悪い意図はなくても、受け手が不快に感じる場合にこれが用いられていることになる。

また、本稿の調査では、言ウ28件のうち、動作主が明示されているものは19件、67.9%と、ラレタクナイ全体の動作主表示率48.5%の中でも極めて高い。田中の調査では、言ワレルで動作主が明示されていたのは27.3%ということであるから、言ワレタクナイと、タクナイをつけた場合に動作主が示される割合が非常に高くなることがわかる。

文末がタクナイの言い切りまたはそのバリエーションである17件のうち、(24)のように直接聞き手に対して発話されたものやその引用が12件、(25)のような形で、相手に向かっての心の中でのつぶやきが2件となる。この14件はいずれも動作主が「きみ」や「お前」などの二人称であったことは前にも述べたとおりである。直接相手に伝えたり、心中で相手に向かってつぶやいたりする場合には、すべての例で動作主を明示していることは注目に値する。

(24) お前に言われたくない！

(25)「てめえに言われたくないや」と心の中でひどく興奮している自分（後略）

不特定の対象は(26)「知らない人」1件のみで、それもその前の文の「近い人」との対比で用いられていることを考えると、ラレタクナイで多く用いられている人二のようなタイプの不特定の対象を表す場合と比べれば、実質的な意味を持って用いられていると言える。

(26) でもやっぱり近い人に言われたいですね。知らない人には言われたくないけど（後略）。

通常であれば、文脈でわかる場合にはわざわざキミやアナタなどの二人称を表示する必然性は低くなるはずであるが、では、なぜ、言ワレタクナイの場合、わざわざ自明である二人称を明示する率が高いのであろうか。

タイ・タクナイは、自己の願望の直接的な表現であり、特に(27)(28)のように、理由や依頼を断る場合など、目上の人に直接向けられると失礼な表現となることがある。言ワレル自体に迷惑感が伴っているのであれば、聞き手に直接向けられた言ワレタクナイは単に「聞き手が言うこと」を望まない以上に、その行為を迷惑だと感じていることを表す強い表現であることがわかる。聞き手を指す動作主に、(29)「テメー」のような野卑な言葉や「なんか」「なんぞ」、あるいは(30)のようなマイナスの意味を表す表現が用いられている場合が多いこともこれを裏付けている。

(27) 頭が痛いので、午後の授業は休みたいです。

(28) — この前話した仕事、君に頼みたいと思うんだけど。

— あっ、その仕事はやりたくないです。

(29) テメーに言われたくない！

(30) 今まで寝てた人に言われたくありません。

そして、この言ワレタクナイの表す不快感は、単に言われる内容が不快である場合だけでなく、資格や権限を持っていると話し手が認めていない相手とその表現行為を行った場合に生ずる感情であると思われる。即ち、「他の人ならともかく、あなたに」ということになる。言い方を変えれば、「あなたに」などの動作主の部分が、否定の焦点となっているということである。これがわざわざ二人称を明示する最大の理由であると思われる。(31)も、証言の録画を都合のいいように編集したことで検察を非難した刑事に対する検察官の発話である。

(31) 取り調べを録音・録画するシステムさえない警察に言われたくありませんね。(相棒6-9)

これらは、それぞれの文脈で待遇的な違いはあれ、[お前にそんなことを言う資格はない]ので、言ウナ・黙レとほぼ同義であり、相手の「言う」という行為を制止する行為抑制の機能を持っていることがわかる。アンタニなど、二人称+二格を伴って、直接相手に対する非難や不快感の表明として用いられ、その行為がコントロール可能な事態であれば、相手に対する行為抑制の機能を持って用いられるということになる。時には冗談めかした突っ込みのような形で用いられることも多い。また、心の中で悪態をつく場合に用いられることもある。即ち、Vラレタクナイ自体は相手に対する働きかけをもたないが、言ウを用いて直接聞き手に向けて発話されたときに、アナタニのような形で、言ウの動作主である二人称を伴って、聞き手に対する制止の機能を獲得するということになる。

受身とテモラウは互換性を持つものもあり、これにタイがついたラレタイとテモライタイも同様があるが、通常はテモライタイのほうが相手に対する働きかけを強く感じさせる。しかし、言ウに関しては、言ッテモライタクナイの用例は非常に少なく、言ワレタクナイが用いられる場合が多い。

では他の動詞とも共起しうるラレタクナイの中で、どうして言ワレタクナイがそのよう

な制止の機能を獲得したのであろうか。このような言ワレタクナイの多くが相手との会話の中で、その相手に対して用いられているが、そのような会話の中で、相手をする最も多い行為は当然何かを言うことである。そして、その言うという行為は直接言う行為の受け手である主体と密接な関わりを持ち、主体に不快感を抱かせる可能性も高い。また、その言うという行為は、高い達成の自己制御性を持つコントロール可能な行為であるから、それを制止したいと感じることも多いであろう。即ち、会話の中で発生する頻度が高いことに加え、相手の眼前で直接相手に向けて行われる行為であること、高い自己制御性を持っていることなどがその理由ではないかと思われる。

言ウが受身の形で多く用いられている中で、言ワレタクナイのこのような用法は頻度が高いとは言えないが、他の動詞にはない独特の振る舞いをする点は注意が必要であろう。この言ワレタクナイは、もともとと言ワレルの持つ迷惑感に加え、タクナイという話し手のマイナスの願望を直接相手につける不快感を帯びた表現であることから、待遇的にはマイナスとなる。即ち言ワレタクナイはそれが使える相手に制約があり、通常使えない相手に使う場合には、それ相当の強い拒否を表すべき状況であることになる。(32) のような用例があり、発話者としては「お前」を「貴方」、「言われたくねー」を「言われたくないです」と言い換えることで丁寧になることを意図したものであろうが、実際には言ワレタクナイが持つ不快感はいくら丁寧語等を付加しても消えないことは明らかであろう。

(32) 「貴方に言われたくないです」→お前なんぞに言われたくねー

言ワレタクナイの他に、同様の機能を持って使われたと思われるものに、(33) 指図サレタクナイ・(34) 褒メラレタクナイがあった。ただし、(34) は逆に相手がそう思っているのではないかという疑問であり、二人称ではなく、「おれに」が用いられている。

(32) 「凜子さんと組んで私を売った人に指図されたくない」と、美保はわざとらしく恭一にしなだれかかって言い返す。

(33) なかなか、言葉遣いの正しい、いい少年だ。なんて、おれにほめられたくないか。

このほか命令スル・注意スル・干渉スルなどもそのような用法を持つ。どれも、発話や表現的態度を表す動詞であり、XとYが何らかの相互作用を行っているときに、その過程で起きたYのXに対する発話や表現的態度に対し、Xがその行為を非難・制止する機能を持つ用法であると言える。

4. 構文

ラレタクナイはさまざまな文型とともに用いられている。

連体修飾

非常に頻度が高かったのが、「知られたくない秘密」のようなVラレタクナイ＋名詞の形で、60件、ラレタクナイ全体の15.7%である。そのうちの17件、28.3%が知ル、7件、12%が見ルであった。この2つの動詞で、連体修飾全体の4割を占めていることになる。また、

知ルを用いた例は65件であるから、その26.2%、4分の1が、連体修飾、即ち「知られたくないN」の形で多く用いられていることがわかる。

表13 連体修飾と動詞

	せりふ+話	地	相 談	その他	計
知る	1	2	5	9	17 / 65
見る	1	1	2	3	7 / 49
言う	1	0	1	0	2 / 28
聞く	1		0	1	2 / 9

また、トイウ／ッテイウNは12件で、Nは心理・気持ち・想イ／思イが2件ずつ、感ジ・欲望・部分・考エ・遠慮・コトがそれぞれ1件ずつであった。この12件に先のラレタクナイNを合わせると72件となり、18.9%、5件に1件は連体修飾で用いられていることがわかる。

一方「少納言」で調べたラレタイは100例中、VラレタイNは13件、13.0%、VラレタイトイウNは16件、16.0%、これを合わせると29件、29.0%となる。このように連体修飾の頻度は3割と、ラレタクナイより高いが、知ラレタクナイのように、ラレタイNで多く用いられる特定の動詞はなかった。

言い切り

次に多かったのが、(35)(36)のような言い切りの形で、ラレタクナイ／ラレタクアリマセンは56件、15.5%、これに終助詞などが付加されたものがシ5、ナア・ワ2件、ヤ・ヨ・ケド・モン1件ずつ、計69件となっている。しかし、直接聞き手に向けられたものやその引用はこのうちの18件であった。ラレタイは言い切りが24件、24.0%となっている。

(35) 泣き顔をおじいちゃん見られたくありません。

(36) 出世の道具されたくない

ラレタクナカッタ／ラレタクアリマセンデシタは14件、3.9%、ナやノが付いたものを合わせて16件、4.2%であった。ラレタイはラレタカッタ13件、これにナやノが付いたものが3件で、計16件、16%と頻度が高かった。

カラ・ノダなど

～カラは40例、10.5%であった。(37)の1例以外は、(38)のように、「～から。」「～からだ。」のように文末に使われていた。ラレタクナイはカラを伴って、何かをしたりしなかったりする理由や原因として用いられる場合が多い。そしてそのほとんどが、文末で使われていることから、後で理由・原因を付け加える用法が多いということがわかる。

(37) みんなまわりが書かれたくないから、気づかってるのかな。

(38) 「あんたのせいで朔夜はいい子でいなきゃならなかったんだ。あんたに嫌われたくなかったから、見放されたくないから。」

表14 ラレタクナイカラの使用状況

		会 話	話し言葉	地	相談他	その他	
現 在	から、					1	1
	から	2	1	4	5	5	17
	からね／な	5	1				6
	からです／だ	1		1	2	1	5
	からだよ	1					1
	からでしょう	1					1
	からではないでしょうか		1		1		2
過 去	から	1					1
	からです／だ			5			5
	からだろう	1					1
	からじゃないのかね	1					1
計		13	3	10	8	7	41

これに、後から何かの状況説明を付け加えるノダやそのバリエーション38件を合わせると78件、21.6%と、2割を超える。(39) のようなモンも同様の機能である。このように、ラレタクナイは事態の理由や原因として使われる場合が多いが、そのほとんどが、自分や相手の発話に後からその背景を付け加える形での用法である。「ラレタクナイカラ、～」のように、文の前件として使われると長くなってしまうことが、その一因であると思われる。

(39) 「結婚すればいいじゃない」

「いや。そんなことして、縛られたくないもん」

以上のことから、ラレタクナイはカラ・ノダなどを伴って、自身や他者の発話に理由や原因、背景などの説明を加えるタイプの用法が非常に多く、それ以外では言い切り、連体修飾などの形でよく用いられることが明らかになった。特に知ルはその4分の1が連体修飾の形で用いられていることがわかった。

5. 考察

以上、さまざまな角度からラレタクナイの分析を行った。その結果、ラレタクナイとともに用いられる動詞は「認識」や「知覚」を表すタイプが多く、誰かに秘密や情報が露見することを望まないことを表すもの、言い換えれば、個人の秘密や情報を守りたいという意味を表す用法が多いことがわかった。一方ラレタイには知覚や認識の用法は非常に少な

かった。

また、ラレタイ・ラレタクナイともに「態度」が多かったが、ラレタイは、特に強い立場にあるYが弱い立場にあるXを自己の下位者として扱うタイプの受身がほぼ半数であった。それらは主に、YがXを弄ぶタイプのものや、甘やかして取り扱うタイプのものであった。一方ラレタクナイは、振り回す・束縛スルなどの自由を奪うタイプが最も多く、次いで、仲間ハズレニスルや裏切ル・舐メルのような、仲間以外・同等以下として扱うタイプの動詞が多かった。つまり、ラレタイは自己をYの下位者と位置づけて特別扱いを望み、ラレタクナイは下位者ではなく、他者から自立していたいことを表す場合が多いことが明らかになった。このようなラレタクナイはラレタイ、即ちYが弱い立場にあるXを自己の下位者として扱うことへの否定を表し、ラレタイとラレタクナイとが同じ事態を描く表と裏の、パラレルな関係であることがわかる。

また、「態度」に含まれる「評価」に関しても、ラレルは認メルなど、Yからいい評価を受けたいことを表すものが多かったのに対し、ラレタクナイは悪い評価を受けたくないことを表すものが多く、これもいい評価を望むことと、悪い評価を望まないことという同じ事態を別の角度から描いたものであると言える。

一方、ラレタイ・ラレタクナイともに「相手への発話」はそれぞれ8.2%、10.0%と割合としては大差はないが、ラレタクナイで2番目に多いのに対し、ラレタイの中では5番目と、順位としては上位50%の圏外であることから、どちらかと言えば、ラレタクナイで多く用いられる形であることになる。その中には、話し手Xが多くは聞き手であるYに、自己に対する指摘や指示などの表現行為を望まないことを表す言ワレタクナイも含まれている。このように、ラレタクナイは相手から批判されたくない、さらには何かを指摘されることを望まないという用法が多いことがわかった。

一方、ラレタイは、Yを何らかの意味での上位者、決定権を持つものと位置づける身体的接触を表す動詞や主に好意を受けるタイプの動詞の頻度が高かったのに対し、ラレタクナイにそのような傾向は認められなかった。

このような身体的接触や好意を受けることを望むのはラレタイ特有の用法であり、秘密の保持を望むことを表す用法や言ワレタクナイのように、主に二人称の動作主を伴って、聞き手に対する行為抑制を表す用法はラレタクナイに特有であることがわかる。

即ち、ラレタイとラレタクナイが同じ願望を異なった方向から描くパラレルな用法と、ラレタイ・ラレタクナイそれぞれが独特の意味・機能を担って使われている部分とがあるということである。しかし、その独自の用法も、突き詰めれば、何らかの意味での力関係に基づく行為、言い換えれば私的領域への受容を表すラレタイと自己の領域や情報の保持に対する願望を表すラレタクナイというそれぞれの性質が典型的に現れている部分であると言えるであろう。ただし、このようなラレタイの特徴は、動作主が有情物である場合にのみあてはまる。これは、ラレタイが基本的には人と人との関係の中で用いられる構文であることによるとと思われる。

また、ラレタクナイは、後から事態の理由や原因、状況説明を付け加える用法が非常に多い。その他には、多くは二人称の動作主を伴って相手への制止の働きかけの機能を帯びた言ワレタクナイ以外は、相手に直接向けられるというよりは、連体修飾として用いられ

る場合が多こともわかった。さらに、ラレタクナイは動作主を表示する率が受身全般やラレタイに比べてきわめて高いことも明らかになったが、これはある行為の生起や継続を望む、あるいは望まない場合にはその行為の動作主に対する関心が高いこと、また、否定の焦点になりやすいことがその主な理由であると思われる。特に言ワレタクナイは動作主を表示される率が特に高いが、これも「他の人ならいいが、あなたには言われたくない」というように、二人称動作主が否定の焦点になる場合が多いためである。

このようにラレタイとラレタクナイは、同じ事態の裏表となる部分と、それぞれに固有な部分とがあるが、ラレタイが態度や相手への接触という特定のサブタイプという典型的な用法に集中していること、また、Xが、自己のコントロールを超えてYが私的領域に侵入してくることを望むことが、事態によっては通常不自然であると感じられることから、時に暴力的・性的なニュアンスを生むのに対し、ラレタクナイは突出して頻度の高いタイプがなく、比較的分散して現れていることに加え、自己の領域への侵入を望まないというきわめて自然な願望を表していることから、ラレタイの否定形という以外に、構文故の特別なニュアンスは感じられにくいという違いが生ずるのではないかと思われる。

6. おわりに

本稿ではコーパスによって収集されたラレタクナイの用例を分析し、それらをラレタイとの比較も交えて考察した。その結果、私的領域への侵入を受容することを表すラレタイに対し、ラレタクナイは私的領域を保持したい願望を表すこと、ラレタクナイは、ラレタイの否定形である部分と、独自の用法や機能を持って使われている部分があることなどがわかった。さらに、なぜラレタクナイがラレタイのような独特のニュアンスを持たないのかも明らかになった。

ただし、今回は書き言葉と話し言葉との特徴がはっきり出るような用例ではなかったため、テキストによるラレタクナイの違いについては考察することができなかった。

今後は実際の発話も含めたより多くのデータを分析することで、さらに詳しくラレタイやラレタクナイの共通点と差違を解明していくことが筆者の課題である。

【注】

1. 特に断りのない例文は「KOTONOHASHI少納言」の用例である。
2. 金水他（2000）参照。

【参考文献】

- 庵功雄（2014）「日本語話者コーパスから見た日本語の受身」『2014年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 21－23, 日本語教育学会
- 金水敏他（2000）「2 否定の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 久野暲（1983）『新日本文法研究』大修館書店
- 熊井浩子（2006）「ラレタイの意味と機能」『静岡大学留学生センター紀要』5号, 1－14
- （2010）「ラレタイとテモライタイの意味と用法に関する考察」『静岡大学国際交流センター紀要』第4号, 1－21

- 志波彩子（2012）「4つのテキストにおける受身文タイプの分析」峰岸真琴他（編）『コーパスに基づく言語学研究研究報告9 フィールド調査、言語コーパス、言語情報学IV』, 233 – 294, 東京外国語大学
- 田中道治（2005）「話し言葉の受身文―「言われる」を中心に」『日本語・日本文化研究』11号, 66 – 79, 京都外国語大学留学生別科
- 許明子（1998）「日本語と韓国語の受身文の使用に関する一考察」『日本言語学会第116回大会予稿集』224 – 229, 日本言語学会
- （2004）『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房
- （2005）「「言われる」受身文の使い方について」『日本語教育論集』第20号, 1 – 14, 筑波大学留学生センター

On the Meanings and Usages of *V-Raretakunai*

KUMAI, Hiroko

This paper investigates the meanings and functions of *V-raretakunai*, negative form of passive plus hope in comparison to *V-raretai*, regarding the percentage of Agentive Passive, characteristics of agents, types of verbs and subtypes of passive which co-occur with each expression. Through the analysis of examples, it is found that more agentive passives are used with *V-raretakunai* than *V-raretai* and that such verbs as *shiru*, *miru*, *iu* and *omou* and the subtypes of passive classified as ‘perception,’ ‘cognition,’ ‘reporting’ and ‘attitude’ including ‘evaluation’ are most frequently used in case of *V-raretakunai*. Among these, evaluation and attitude expresses the speakers’ hope to protect their personal territory or information just opposite to *V-raretai*, which expresses the hope to get strong impact from agent Y superior to the speakers. In this sense, *V-raretai* and *V-raretakunai* are regarded just as two sides of one event. However, types of passive which express ‘physical contact’ and ‘affection’ are mainly used with *V-raretai*, whereas *iwaretakunai*, often accompanied with agents expressing second persons, usage which has a function to restrain the hearer’s action, is only found in *V-raretakunai*. This means that *V-raretai* and *V-raretakunai* also have their own meanings and functions, which after all conform to the characteristics of each expression. And yet, the *V-raretai* expresses the acceptance of the impingement of X’s personal territory which can be regarded as unusual and thus sometimes gains a salient connotation of violence or sex, while *V-raretakunai* doesn’t have a special connotation beyond the negative form of *V-raretai* because that expresses a natural human wish for their territory not to be intruded.